

愛の源を愛しなさい

昨日とおととい、あなた方は皆ここでアーナンダ（無上の喜び）の甘露を飲む機会を得ました。今日はあなた方がいくつかの霊的な講演の甘露を飲む機会を持たたことを、私は嬉しく思います。あなた方は皆、月夜の海の波のように見えます。もちろん、すべてのプレーマ（愛）の源に因をなす、あなた方が持っているプレーマこそが、私の目に映るあなた方の顔に輝いているアーナンダの本当の理由です。あなた方もよくわかっているように、ダルマ（徳）を再興させるための私の降臨と決意は、どちらもこのプレーマの結果です。

しかし、アーナンダは有用な行為に向けられなければなりません。目の価値は、盲目になって初めてわかります。水の価値は、どの水道の蛇口からも豊富に水が出て、桶に水を汲めるときではなく、水が不足したときに初めてわかります。貯水池や井戸が干上がると、人々はコップ一杯の水を求めて泣き叫びます。アーナンダについても同じことが言えます。自分にできる間に、アーナンダを集め、蓄え、そして、育てて、干上がったハートにアーナンダを注ぎなさい。

昔、シャンカラは、人は無限なる全能の神であるということへの信心を人々の心に取り戻させよう努力しました。シャンカラは、人が自らの実体へと向かうことができるよう、人の心に居座っている邪悪な特性を取り除こうとしました。自らの実体をちらりと見ただけで、人のエゴ〔自我意識、アハンカーラ〕はなくなり、慢心と失意もなくなります。そうになると、賞賛されて喜ぶことも、非難に悲しむこともなくなります。そして、どんな嵐でも揺らすことができない山の頂のように、人は堅固になり、揺らくごとはなくなります。映画館のスクリーンのように、中傷の火や激賞の雨の影響を受けることもなくなります。

仏陀は、かつてブッダガヤで、善と悪、評判と不評、賞賛と誹謗は二本の足のごとしと言いました。これらは生きていく過程において避けることができないものです。どちらか片方の足を失くせば、人は歩けなくなります。人の体には食べ物と屑の両方が入っています。人は赤い血液が通る血管と青い血液が通る血管の両方を有しています。都市の地下には、飲料水を運んでくる水道管と、排水を運んでいく下水管の両方が通っています。

他の人を幸せにするために 他の人に善いことをしなさい

あるナースティカ（無神論者）が仏陀のところにやって来て、暴力的な言葉で仏陀を挑発し、中傷しました。さらに、仏陀と弟子たちを非難し、最も忌むべき部類の邪悪な振る舞いを示しました。仏陀はそれらを聞いてはいましたが、少しも反応しませんでした。その哀れな男の口は疲れ果て、男は怒り狂いました。男はプンプン怒っていなくなりました。

一言も言い返さなかったわけを尋ねられたとき、仏陀はこう言いました。

「あわよくば客になろうと、誰かが家の戸口にやって来たとき、“いらっしゃい” だの“いつ来られたのか？” などと言って、最低限、自分が相手に気づいたことを示そうものなら、相手は家に居座ってしまうだろう。しかし、その相手に注意を払わず、話に反応しなければ、相手は腹を立てて帰ってしまうだろう」

あなた方の多くは、いくつかの新聞が私に関する中傷をしていることを苦しく感じています。何かしなければいけないと、多くの人々が強く主張しています。しかし、私はその人々を制しています。なぜなら、それこそが賞賛と中傷の両方を扱う最善策だからです。

海はあふれることも干上がることも知りません。海は常に満ちていて、威厳があり、平然としています。

私はあなた方に、他の人を幸せにするために、そして、快適に生活する手助けをするために、他の人に善いことをするように勧めてきました。これはサット カルマ（有益な行為）と呼ばれます。さて、嘘を並べて糧としている新聞は、道徳性の低い人々からわずかなお金をかき集めることができます。これもまた利益を生み出す行為であり、でっち上げの馬鹿げた考えを広めている人々は、それが誤りであり、自分の頭の中で作り上げたことだと知りながら、それを行って喜んでいきます。彼らを止めることはしないでください。なぜなら、一銭も使うことなく、あなた方は今、彼らに喜びを与えているのですから。泥沼の中でどんちゃん騒ぎをさせておきなさい。喜びは自分の心（マインド）から生じてくるものです。心が邪悪なとき、心は邪悪なものごとから喜びを引き出します。心が清らかなとき、心に喜びをもたらすことができるのは清らかさだけです。

神は多くの様々な形で顕現する

ヒランニャカシプ〔羅刹王〕は、神はどこにもいないと宣言しました。息子のプラフラーダは、神は今ここにおわすと言いました。父は恥と滅亡を被りました。息子は祝福の高みに到りました。息子は、一切は神が多様に顕現しているものであることを知っていました。

新しく家族の一員となった若い嫁が、家族に夕食を給仕していました。食事をしていた者たちは、ギーとバターとバターミルク〔乳清〕を要求しました。その嫁は、その代わりに牛乳を持っていき、簡単に給仕を済ませてしまいました。というのも、要求されたものはすべて牛乳の中に入っていると考えたからです。

主なる神の^{アーナンダ}歓喜に浸っているとき、あなたはそれより小さなあらゆる歓喜の所有者でもあるのです。海に潜ったなら、真珠を見つけなければなりません。カルパブリクシャ（願望成就の木）のもとに行ったなら、至福を求めなさい。あと少しの努力で最も巨大なものが手に入るとき、小さなものを切望してはいけません。人間には、巨大なもの、至高なるもの、無限なるものと一つになりたいという自然な願望があります。というのは、ハートの奥深くには、それと同一の至高なるものが存在しているからです。これは母を恋しが幼い子牛のようなものです。どの子牛も、自分の母はどの牛かを知っています。あなた方は子牛と母牛を何頭も所有しているかもしれませんが、子牛を自由してみなさい。すると、一頭一頭が自分の母牛を見つけ出すでしょう。それと同じように、あなた方は、生得の糧と援助はどこで手に入れることができるかを知らなければなりません。それは、神という、あなたがそこから生じた存在からのみ手に入れることができます。

人間の悲しむべき現状

霊性の道の歩みには、あせりがつきものです。というのは、あなたをさっと捕らえようとして、死が待ちかまえているからです。

ガンジス川の渡し場で、何百人もの人たちが、対岸から渡し舟が戻ってくるのを待っていました。船が着くや、人々はわれ先にと船に乗り込みました。船頭が渡し舟を岸に着けようとしている間、人々は同乗者や船頭と言い争い、互いに叩き合っていました。人々は、内輪もめと喧嘩、それと、船代を値切ることに夢中になっていました。さらに、もう少ししゃがむスペースが欲しいなどと要求していました。人々は自分たちの命が危険にさらされていることには気づいていませんでした。しかし、その中にいた賢人が人々に警告を与

えました。

「兄弟たちよ、あと10分で私たちは岸に着きます。静かにしてください。そんな小さな欲は忘れて、神に祈りなさい」

これが、現代人の悲しむべき現状です。死に瀕していながらも、人は大騒ぎをし、空しい快樂のために貴重な瞬間を無駄にしているのです。

間違いは、自分と体を同一視していることにあります。体は自分が住んでいる場所であり、乗り物であり、器にすぎません。自分を体の住人と見なしなさい。そうすれば、あなたの悲痛はほとんど消え去ってしまうでしょう。そして、自己中心的なところが減るでしょう。それは、他の体の住人である他者との親近感を感じるようになるからです。

かつて、ヴィヴェーカーナンダが海外を旅している最中に、ある街にいたときのことで、人々は、ヴィヴェーカーナンダの中に偉大な僧と造詣の深い学者の面を見出しました。そのため、ほとんど三日間、ひっきりなしに訪問者がやって来ました。サーダナ〔靈性修行〕に関する細かな点を質問する者もいましたが、多くの人は、シャーストラ〔経典〕の中に見られる論理、文法、倫理の難解さについて論を交わしました。学徒たちは、ヴィヴェーカーナンダが国家の更正のための問題点と解決策を示唆してくれることを求めています。その場には、隅に坐って、一言も話すことなく、熱心にヴィヴェーカーナンダを見つめる老婦人がいました。その老婦人は三日間ずっとそこにいて、そばに寄る機会を待っていました。

神の恩寵を授かるための資質

ついにその機会がやって来たとき、老婦人はヴィヴェーカーナンダにこう尋ねました。

「息子よ！何か食べものをお持ちしましょうか？あの人達はあなたに何も持ってきませんし、街に行って食べ物を手に入れるためのほんの数分間もあなたに与えていません。おっしゃってください。私が走って行って、何か食べ物と飲み物をお持ちしましょう」

ヴィヴェーカーナンダは、その母親の優しい心を大変喜んで、言いました。

「あなたは本当に祝福されています。ほんのわずかな学識と奉仕への熱意が、人を救えるのでしょうか？思いやり、奉仕、隣人の立場に立って苦痛と悲しみを和らげようと努めること——これこそが恩寵を勝ち得るのです。愛と奉仕によって、心からエゴ〔自我意識、アハーカーラ〕が一掃され、心に神が映るようになるのです」

ある男が別の男に借金をして、借りたお金は明日の日の出に返すからと約束しました。すると、相手の男が尋ねました。

「しかし、明日太陽が昇ることは確かなのか？」

すると男はこう言い返しました。

「なら、私が生きていてお金を返すことができることや、あなたが生きていてお金を受け取れることは確かなのか？」

人生ではすべてが不確かです。ですから、まさに今この瞬間から歩を進め、あなたにそれが可能な間は、少なくとも何歩かはゴールに向けて進みなさい。その試みそれ自体が主なる神を説き伏せて、あなたがゴールに到達するまで滞在を延長させてもらえるかもしれません。

神への愛は、狂信や他の神の御名や御姿への嫌悪へと退化してはいけません。この種の弊害は、今、地位の高い人々へも影響を及ぼしています。しかし、あなた方はこれを避けなければなりません。主なる神を崇敬し、罪の恐れをもって歩む人達は、誰もが兄弟であ

り、あなたの近しい親類知己であり、親族です。外見上の服装、言語、肌の色、崇敬や恐れを表現する方法などは、少しも重要ではありません。

砂糖人形は、砂糖であることに価値があるのであって、製造者によって与えられた形に価値があるわけではありません。甘さが人に砂糖人形を買わせるのです。その形が象であろうが、犬であろうが、猫、ネズミ、ジャッカル、ライオンであろうが関係ありません。それは個人の好みの問題です。どの砂糖人形も甘く、それこそが必要不可欠なことです。甘さは、マーナヴァ（人間）をマーダヴァ（神）へ、プラブリッティ〔外へ向かうこと〕をニブリッツティ〔内へ向かうこと〕へ、アーナンダ〔歓喜〕をサット・チット・アーナンダ〔絶対実在・統合意識・歓喜〕へと引き寄せます。こうした成長への欲求が大きくなると、低次の欲望と渴望は収まります。

神に奉仕する最高の形

サルヴァム ヴィシュヌマヤム ジャガト
この世はすべて内在の神で満たされている

この真実をプラフラダは知っていました。プラフラダはそれを学習と体験によって知っていました。プラフラダはそれを常に存在する事実として知っていました。それゆえ、目の前に顕れた主なる神から、叶えてほしい願いは何かと尋ねられたとき、プラフラダは、父親を生き返らせることも、王国の再興も、長寿も、富も名声も願いませんでした。プラフラダは、すべての人の苦しみと悲しみを和らげる機会を与えてくださいと頼んだのです！ 万人となって顕現した神は、神に奉仕する最高の形はそれらの顕現に奉仕して救済と喜びを与えることだと知っていました。口は甘美な慰めの言葉によって、そして、手は害のないやさしい行為によって、そのことを正当化しなければなりません。体は、ウパヴァーサ、すなわち常に神の御前で過ごすことに従事していなければなりません。

あなた方の多くは、ウパヴァーサは「断食」を意味すると誤解して、断食をしすぎていることを私は知っています。あなた方は、月曜日にはシヴァ神を喜ばせるために断食し、火曜日にはラクシュミー女神を喜ばせるために、水曜日にはまた別の神の怒りを鎮めるために、木曜日には私の御名のもとに、金曜日にはガウリー女神のために、土曜日にはシャニ〔土星〕を恐れて、そして、日曜日には太陽の恩恵を得るために、断食をしています。ラール・バハドゥル・シャーストリは、食料危機の解決の手だてとなるように、あなた方も一日断食したほうが良いと思いましたが、あなた方はそれをはるかに上回る援助をするつもりでいます。であれば、その断食があなた方を神の恩寵に近づけてくれることはないでしょう。

何ごともやりすぎず、ほどほどに

ウパヴァーサとは、こうした神聖な日に、自分のすべての思考と行いと言葉を神に関するものとしなければならない、そして、神の「近くで」、神の「中で」、神の「ために」過ぎさなければならぬということの意味します。それは、食事をすることや、眠ることといった肉体的な行為は二の次にして、瞑想とジャパを第一としなければならないという意味です。もし断食のせいでああなた方の体が衰弱したら、神が責められることになるでしょう。つまり、あなた方はただ、自分たちが崇める神に対する人々の中傷を招いているだけであるということです。人々はあなたのところへやって来てこう言うでしょう。

「何ということだ！ このサイ ババ プージャを始める前、君はもっと健康そうに見えたのに。今は痩せ細って、弱って見える。動くのもやっとなだ！」

それから、人々は続けて私のことも同じ調子で話をするでしょう。

何事もやりすぎはいけません。ほどほどにして、賢明でありなさい。あなた方は私がサルヴァブーターン タラートマ（万物の内なる促し手）であり、サルヴァヴァーピ（遍在者）であるということについて話します。しかし、あなた方はナヴァラートリやシヴァラートリのときにここに来るのを妨げられると、怒ったり、落ち込んだりします。神は遍在であるということへのあなたの信仰心を裏切ってはいけません。

特に女性は、家の年長者と夫に従順であらねばなりません。夫や子どもを邪魔だと思っ
てはいけません。夫に対しても、子どもに対しても、ほんの少しの嫌悪感も抱いてはなりません。夫を主なる神と見なして崇めなさい。ヤショーダーがシュリ・クリシュナに奉仕したように、子どもをクリシュナと見なして子どもに奉仕しなさい。夫と子どもの中に、あなたが崇めている主なる神を見なさい。

クリシュナデーヴァラーヤ皇帝の時代に、ヴィジャヤナガラで伝染病が発生し、あっという間に広まっていきました。その伝染病はネズミを通して広がると伝えられたため、どの家にも猫一匹と、餌代としての「猫手当」が支給されました。しかし、ネズミの数は一向に減る気配がありませんでした。数日経ってわかったことには、皆、猫手当を不正に別なことに使ったために、猫はネズミを捕まえて食べるなどできないくらい弱ってしまっていたのです。

猫には餌をやらなければなりません。そうすれば、ネズミを食べることもできるようになります。それと同じように、体には食べ物を与えなければなりません。そうすれば、悪い行い、快楽趣味の欲求、邪悪な性癖を、力強く攻撃して鎮めることができるようになります。この作業が行われなければ、人間の中の神性が開花することはないでしょう。

木の幹の周囲の土は時々掘り返さなければなりません。そうすれば、根は強くなります。枝は剪定しなければなりません。そうすれば、花を咲かせ、実をつけるようになります。それと同じように、人も心の縁を掘り起こし、性格の悪いところを伐採して、生命という木の手入れをしなければなりません。

災難は神の恩寵の行為と見なしなさい

プージャーで花を供えるのと同じように、すべての行いを神の御足に捧げるという姿勢を守りなさい。すべての呼吸を神への供え物にしなさい。災難に狼狽してはいけません。災難は恩寵の行為と見なしなさい。もし事故で手を失っても、命が助かったのは主なる神の恩寵のおかげだと信じなければなりません。神のサンカルパ（決断）なしには何ごとも起こらないということを知っていれば、起こることのすべてに価値が伴います。

あなたは裏庭に生えている蔓草（つるくさ）をほったらかしにしているかもしれませんが、もし賢人が通りかかって、あれは蛇の毒を消すことができる珍しい薬草だと言ったら、あなたはその蔓草のまわりに囲いをして、子どもが遊んで葉っぱをむしらないようにするでしょう！

主なる神がすべての原因であり、源であると知っていれば、あなたはすべての人を謙虚に敬意をもって扱います。それぞあなたを早くゴールへと到らせてくれる道なのです。

1966年2月20日
プラシャーンティ ニラヤム
Sathya Sai Speaks Vol.6 C5